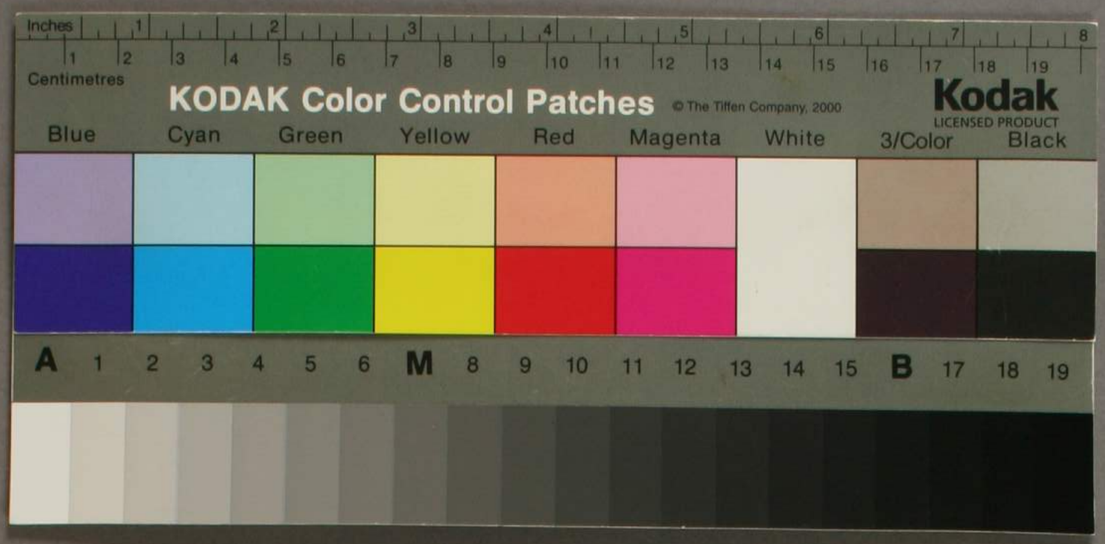
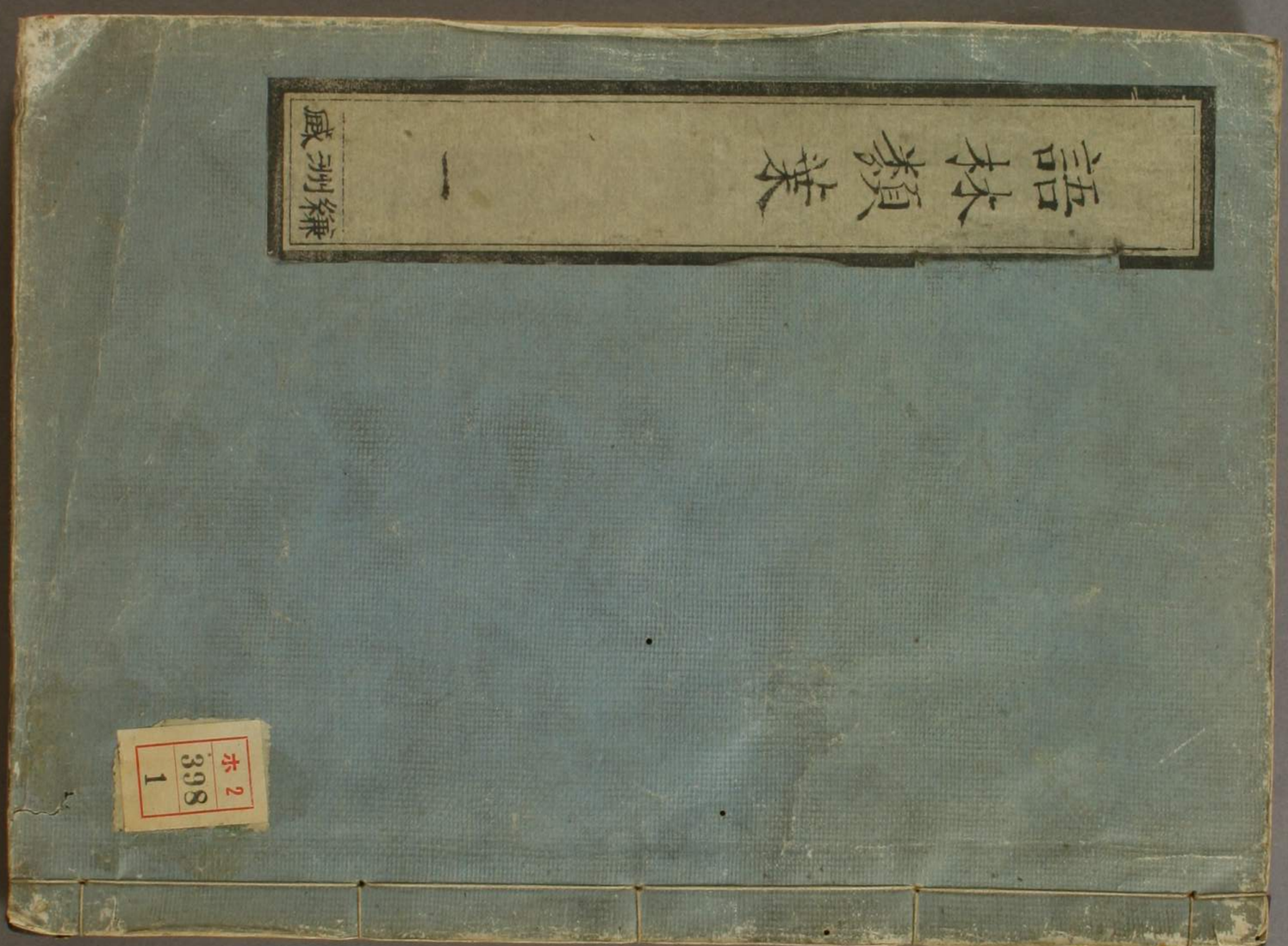

Inches
Centimetres
KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
A
M
B


五口未負素津未
一
威洲練

ホ2
398
1

加2門
378
1-0
巻

宗相国小倉文庫

語林類葉巻之一

阿行

あの部

清水濱臣輯

二言

あ〻 疑辞之○今ハエ〻トフ

源氏若菜上 そゝくにみもおほくしうなきいめ
とうそそふきあなさう○

あし 悪

三条のあ〻宰相家政続世継 おけのまろ ○あし法眼

澄真 続世継 うきくさの花のいろ ○東鑑 卅四 十一ウ 悪別

當家童 ○ 同同 廿五オ 武田伊豆入道光蓮 令義絶

次男信忠 号悪三郎 ○ わく石 源氏末出 ○悪左府 ○ 宇治頼長

東鑑 四十二オ 悪兵衛尉 兵衛尉義康 ○ 同十二 十四ウ 悪権守

下妻四郎弘幹 ○平治物語大全 一卅六ウ よしとも嫡子源太の悪

兵衛尉義広 有 希

悪兵衛尉武

あせ

変 ○同 卅九

山家下 ○同

つまれめくきすのちやうあせりいちりとなまて生かりる

○

あの 彼之

源氏 あの女房の浩ぶみそ ○ 枕冊子 十七 限 女房

のつけ給へる人をさへあの御とをきみ給といへる○

あ海

金葉 恋上 さしる事ありてえまくおもひつまをしる女の

もとよりいひおこせ侍りける 人志らん

あさ海やかにつきるゆるりたる草をいあ海のきさん

俗云ふ志ぬ白ふ人の申ひけれいのちいきさるをあ海のいのち

さしりいしと云あまの詞に同しくそまりけぬあほさりのをさい

ともといふは海士といふ也へし 海士とのをえて人ゆかぬ

かりくもの詞傍係の 考へし ○ 剃の意きく ゆゆうしいく

二

曾丹集三百六十首中二月終

○

あまを

類史 八巻五 天長八年十二月晉賀茂祢内親王其辞
曰云云皇大神乃阿礼乎止賣尓内親王鈴毛云云
代尓奴子女王乎卜食定五○三代実録 廿六 貞観
十九年二月廿四日賀茂神社祢内親王を定め
つかす告文に敦子内親王乎卜定天阿礼乎度女
尓進状乎云云○本居云あまい奉仕をいつる言ひ

あまを

散木 巻上 雑馬毛亜
云云あまをそろへてとくるをかしきほどにて
夫木 廿二 久安百首 花園左大臣家小大進
春ふかくあまをの歩のゆるきやあをはきの袴

○万一解 四六ウ 藤原之大宮都加倍安礼衛武處女之
友者乎吉呂賀聞○万六長哥 解六 五十四六オ 八千年尓安礼衛
之乍天下所知食跡○本居氏云つかへまつるをいつく
をあまつくといふ

貫之集三
あまをもまた曳ばまてもあるかなの仮名ども

○六帖 社 同○夫木 巻部 八ノ 廿四 三十六ノ 今
絶句なれどあまをの中のうちやすらふもやあをはきの袴

延喜式　草来　阿都加
霊武峯　往生院　哥合　美作
美の池よりまゐる菖蒲おもしろくかくまでもなし
あやめ草ひきてふくこそ

三言

あやめ　赤子

狭衣一下八　あやめのもくさふきまぜてのつ
続世継十五志のみぞき四　あやめにもあらぬ

あやめ　縣

あやめの井戸　後撰春下　○
於遠愚草上四十六　見ゆるまであやめをかけてたのむかな
古今雑下　文屋康秀　あやめ草ひきつるほどのかりそめに
茨城方言　あやめの井戸　○
拾遺抄上六オ　○五位日記　あやめとあるはおとこをまつ

あやめ　贖
万

○公事根源　上世五ウ　神祇官献御贖物あるものいふ方のまた
ありをあやめといふなり人形を作りて其のもとにおく
事なれば古事記に沖哀天皇の営浦
[illegible]

あつまを尋ぬる人のなくもあらんと世のそしりうけつゝ

○後拾遺雑四清原元輔

あるものなつてをそろて仕なをす大盤所

とり一人のおもなきそつまらぬ頭

○おほつれつゝ君の神代秋上後徳大寺左大臣

あきさし鳥名○小鳧之或云越後にて一をあきさしとそ

頼政集上

あきさめのふりしくるのあとをうしやのあきさし友をこふなり

同七月九

もえのゝ月のえにくらふ仏をの深にまよふあきさめのあとをうしやのあきさし友をこふなり

万七十四

山きてかへる浦のあきさめ

山陰雨渡秋沙乍往将居其河瀬雨浪立勿湯目

あゝ月日のゆく

新六 信実

為忠百首 顕広

冬のおく雪ふきつもるらん

○

あくがれ 欠

源朝臣雅俊

ゆくへなきあくがれをしもとゞめをきてかへらぬ旅にいでたつ

○讃岐日記 詳

○業兼

○同 玉かぎる

二才○同同十四○枕草子 三巻二ウ三才 十四 殿 ○まくらのそうし

かくらさくらあけてあくるをまつほに

ぬる験者ノサ○ マナリ

あくる 坐臥 和名胡床 此間名 阿久良 ○足座を○編座を

竹取 抄下 あくるをもまて○同扶考へ○説附韻

海云唐韻宗改胡床曰縄床○書紀雄畧御哥施

都麻 マキノ 択能 阿娯 アグラニ 陁々 タヽ 伺 ○濱松 義上 廿五 のまき

ふえのいまゝ紀の綾板のやうなるもまてなるる

さとの 左右 ○卿 こう やしきてまもるをたゝ

いる 見 ○同同 十四 三 のほうを海北ゆ

あさき 浅黄 センクワ

続世継 八十 ○

と日記に

なくて苑園のおほくの

もをきゝて

一字の

夕菜

あさな　朝菜。朝菜ハ飯食の料ト成菜ナリ

万六　去来兒等香椎乃濱爾白妙之袖左倍所沾而朝菜採手六

いさおとも　かしこきかみの神さびて

曽丹集

催馬樂　我門

あさな

あさな

古今　春

あさみどりのあさな〳〵

○

あさな

あさなの入道　後成　長明無名上○ナシ　の大将　大徳寺　九大臣　同上○天べんのおもと　上ノ平六条　十訓抄○まこと

山遠兵　ロ五十六　庭中納言親経　々鳥羽院時ヲ公ニ自家山遠我家ト作テ山遠ノ弁トリ名ヲレケルカヤウイヨ〳〵心ウツシ同異名ナレトモサルウツシヤ　昨街ヨヒノ特従ト　ツナラレタルハ優ニヤサシクカシ　さもう現のかね

安樂塩　十訓抄平六庭勘名由父母ノ家ヲツノリ名ヲケヨト思聴ニテサワキケル程ニ縁ヲリ落ニケリ安名ヲ付ケテケリ

○ふし菜のかゆ　○てこきのそけ　俗理　菜苑巻　山世四

○ちくらの関白　顕隆　続世継　ちくらの院

○ちくらの尭人　後任平

○待宵侍従　十訓抄平六庭　○物

○紅梅大将　官　祥

大將ヲヤアマル也トイヘリ 淸原 古事談 ○やはらの大納言 臥雅六条 ノオホイ殿ノ御子 續世繼 ○越前侍從家隆 拾遺愚草 ○堤中納言 兼輔 拾遺 ○五條三位 俊成 ○かてゝ加の字相 師兼 ○宮内卿 ○羅大將 八条大將保忠 大鏡 ○源中納言 兼忠隆号能登大夫後改名資基 作者 袖中二 ○岡崎三位 長明無名抄 ○滋野の宰相 ○扇中納言 忠輔 栄花 ○南助 南大納言男内藏助今猶号南助也 文粹一慰小男 博徒 ○南大納言 ○女詩 ○袋草紙 引狹手九記云大伴宿称佗手九

能登大夫資基ハひろう
つねとよゝ被改動
此の事後ひろ

近藏人君意馬とよめり
好色也袋草紙とハ紅葉とも
してよめるもそもそも
よのいろ〳〵まさるべきの
事ゆゑとよめるもさせる

妻字奈刀自 ○廣幡中納言 顯光 栄花 ○菅花 ○同 ○双林寺の尼 千雜上 ○栄花 ○平治物語大后の大饗をはてゝ ○三耀 清行 ○文琳 文屋 ○菅三 ○三善 ○文琳 文屋 ○礼曰已冠而字之成人之道也

ひろう卿
ゝ右の事

素腹 導子 頼忠女 ○同 尊子 泉皇女 ○同 ○同 衣未 田中の儀郎 教通 行成 後朱雀の大將

廿オウ もとゐ…
もとゐのなきしと

一万十六廿一オ有大舎人土師宿祢水道字曰志婢麻呂世云又云巨勢朝臣豊人字曰正月麻呂
同三丁オ有娘子字曰櫻子
同四丁オ有老翁號曰竹取翁

あされ清さきとえん

康秀○万歳 匡房○うり川保祭使 十二オ とこゑいひつるへのものは
○人丸のもと いへハ字之名ハ李房 勧学院学士
の入道 中納言師俊 続世継 九 堀川のみかど○万十六 廿三 有吉田
連老字曰石麻呂○万 大伴宿祢田主字号
仲郎○素性集 にあさ…
に○袖中抄 十三 素性ハ石上良因院に…○袋
中子 四 五 云素性住石上良因院仍寛平法皇宮瀧遊
覧間号之良因○宇治拾遺 二 廿七 三オ あさ…
○吴異記 中ノ十六 字曰山田三郎○同下 廿四条 先祖造寺
有名草郡能応村名曰弥勒寺字曰能応寺也○

同下 廿三条 有一自度字曰伊勢沙弥也○今昔十
一 廿三条 現光寺ヲハ竊寺トハイフム 御中納言 忠輔
江談 三 十ウ○田十ク弁惟成 同上 十五 ○船路君 源道済
同上 十三 ○大法會師子 光茂隆 同上 十三ウ○小蔵親王 兼明親王
同上 十五ウ○あさ…大納言 宗通 続世継 十 …の床○て
…続世継 廿八 …○源
少女 七ウ あされつ…の…

あさべ アナトル 意ナリ

あさじ
源氏竹川 十オ …浅き

○經信卿母集 下六 おもきはいつかれとも[illegible]かはある
つきかけとあさしあつる[illegible]

あざみ

うつほ 一ウ としけこそ[illegible]の人〻かれはあざみして ○源若菜下 廿オ よろ川のやとにつゆくもてゆさこ ○水鏡中 三ウ 人[illegible]あさみ ○同 人生をうちあさみ○

やまのあしだ
まめあしだ

あしだ 足駄

うつほ 廿二ウ 藤原の君くまのあしたをはきて ○榮花 三十一ウ [illegible]とめ

もしあしだ
縄緒のあしだ

ハ小袴きてあしたをはきせのしく杖をつきて ○同十三ウ 御着裳

○下學集 屐 又云足駄也 ○今昔廿二 廣澤云高足駄ヲ履ヲ杖ヲ突テ○盛衰記 五十九 受領ノ鞭ヲ取朝夕ニ覺ノ直垂ニ縄緒ノ足駄ハキテ○同十五七 頭ハカラケ弓打切杖ニツキ平足駄着テ○同十四十 八指縄緒ノ平鉄ハキテ 文覺ナリ○

あしで

十二集アヒ三ウ
林葉五 矢返車立

新古雑下 さゝしぐれて長谷寺にまうでゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

を作家のあるよ[illegible]

[illegible]

あぢきなや ありしきえ

源朝臣 今さのあぢ

[illegible]

○ 同 同

いはさくかるあさとよ

夫木 世一 常磐井入道大政大臣

少女の袋[illegible]

○

あぢきなく あさきの衣にちりつもる○同

俠衣 一 下廿一 廿一 あはれ

下 廿三ウ [illegible]

歌木 恵上 [illegible]

夫木 廿六

源夕旁 廿二リ

あさも

源玉ちるく　土の際小あさもていの（いさゝかなるさまをいふ）

あさる　當　又音ニフ　タウトイヘリ　多部可考合

隆信集物名（上）

つゝしとそあさくつゝ

菜あらそ

花　万代（上下長治二年三月中宮菊合ヨリ）同亭子院女房（女房名）

菊合（上）十訓抄上五十六ノ同ク仆中宮ノ方ニテ菊合トイフヿアリ（秋上）

夫木廿七　○内裏の見今のきくくてかりくくまもりの見あり上人

物　業苑ものゝあはれをしるこゝろ（セモノトヱコヽロナリ）○

詩哥　万代（雑四ノ九）建保内裏詩哥合○夫木三　元久元年　詩歌合　同二　名保三年三月堀川院中宮詩歌合　同二建保二年内裏詩歌合○同四弘安元年仙洞詩歌合○同四建仁二年内裏詩歌合○同四元久元詩歌合○同四後京極摂政詩歌合○同四建暦三年内裏詩歌合

草　後拾遺　誹諧人の菊合ニ　夫木廿七天暦九年十月内裏草合○和名　岡草　久佐阿波世（術藝部）

根　万代　有五大根

前栽　金葉　秋　白河院鳥羽殿ニテ前栽合ニ云○万代　秋上　康保三年八月十五夜内裏前栽合○紀略　康保三（都）　芳院根合之時右方

年閏八月十五日朝干飯御座第西壺分方
有前栽合〇紀畧一延喜元年八月廿五日
有前栽合事〇詞花
〇夫木十一本院左大臣家前栽合

紅葉 万代秋下天暦九年宇九月内裏紅葉合の方

箱 伊勢集小箱合

扇 天禄四年七月七日扇合 於遠雑秋〇金葉秋天大
大后宮の扇合に〇夫木 中務集 皇
も扇合哥読人不知〇金葉秋太皇大后宮扇合 経信

百和香 永保三年准后倫子家侍百和香合 哥 夫木三

物語 後拾雑一五月雨六条お前院 物名
烟の後一下もるる雲間 詞
と同時
〇

紅梅 高光集

匂き梅 陽氏梅枝 源氏

梅花白紅 梅花匂ひ梅花白紅
〇

下文再出
草子　從二位為家朝臣家の草子合に世尊寺行能卿の筆を以て假名を
○金葉亦之
寛覚師

菓寛平菓合○天暦七年十月内裏菊合夫木廿七
赤染集廿一十月の前斎院の菊合
ありもせぬものとそなきの系ひろひ

いかにそのいへ　今葉廿

種　今昔廿八世五　後一条ノ院ノ天皇ノ御代ニ殿上人
藏人有ル限負ヲ尽シ種合セ為ル事有ケリ（ヨリ合スルヲ云）
（テ方ヲ分テ）

女郎花　古今物名朱雀院女郎花合

上文出
雙紙　東鑑廿一ニ建暦三年正月十二日甲寅幕
府女房等有雙紙合會將軍家令判之給○

中務集中ノ
ありあけの

今様　百練抄云永久四年九月廿一日於太上法皇
御所（法住寺殿）有今様合事撰定堪能輩廿人十
五箇夜間毎夜一番被決雌雄師長資賢卿為判者十三日仙洞今様合之次有御遊
上皇令歌今様給希代之美談也

鳥　和名鵆雞　俊世利阿○紀畧二天受元年三月四日於御前有鬪雞事○

馬毛名分　夫木廿八草

貝　袋中子云應保二年三月三日昇殿来十三日中宮即方可有貝合事仍俄所仰下也　夫木廿五

おほえ　假字拾遺

源神おほえ　○狹衣三中四十二ウ　あまたして○源竹川十四○同宿

木　九十五　○

おほえ　万代恋三　雨間　清恒

あんを　案○今俗うしろあんをもちゐるをいふ

中務内侍日記　○同書　○帖屏風に○源氏

祷　○

あんと 安堵

小嶋口号（扶十四上 四十七）

あもき 敷馬 名

保憲女集 かほそはあてやかなもほひとしほそうしゆくと
（続古 廿五ノ）
おもふ○

あやし 血ヨリ

宇津保（十六オ） ものゝうちふ
つゆとうつる事をさ〳〵あやしてゝ○ 同春日詣 この外とこまにも

あやく

松柏名 ものゝあるをはじ
雨漏ることのあるをいふ
夫木土 木院左大臣家前栽方合前栽
うつるあやのほうもあくあをいとゝ
同廿四 分別功徳品 若坐若立若経行処 西行
多ちかましあやく事葉の

あやく 動ク歩にあやく○李吟抄云あやくは

千雑中 定禅法師
思ひあまりそなたの空をながむれば
松玉六（十ウ）
おぼつかなくもかゝる月かな
（古今集一）
をつきのさとの庭の石ぶみ

北院御室集

雪丹集十二月初

あいさつ

西行談抄されてくるつけさせんとあんさ川に人そ
えつけたるまいの奥ゆ一〇

あいおく 愛無ノ意十キコユ

枕冊子三 二オ 梨の花中将 あいまゝおくまる人の許
れとこいきもにいふそにこゝろとゞしてあいおく見
ゆる故

あるおく 安居ノ事ニ〇不用意ノ

狭衣一 下十三 人々のさまにおとなしくてあるあきある
まろうとにいとよく似かよひて○蜻蛉日記さてあのけ
かりしをきなかしのとまりはまにしかりし○河東屋あ
やしくあふれくる人の中まん事も出しぬ人々くて○おもし ナ
ルベシ 奥(オク)ヲ音便にていふなるべし○

あかだな　閼伽棚
高野日記 扶十五ノ四 あかたな新ちかくきつくれ○方丈記 扶十ノ五十五 外のそれ
さまちかき所に閼伽棚を作り○源氏鈴虫 七オ にしの北梱
かたくらのうちのしれをたて

あからめ　アカラサマノアカラニオナジク一寸ヨリメヲツカフヿカ
栄花花山 四十一 まろあからめ此君はいつくまてあからめせさせて
や○大和 百五 十九 五巻廿オ そのくらゐあからめもせずとおもひて
金葉秋 経信 大井川岩波高くいそしかきの空にあからめもせし
六帖橋 津の国の難波の浦のかたらし君をしらせてあからめもせし
令昔 廿七 卅一 白地目モセス守レト 八 ○続紀 廿六 六廿
天応元年 二月詔 安加良米佐須 如事久 ○景行紀 廿七 不意(ユクリモ)
之間 倏忽(オリアカラノサスコト)ニ 亡我子(ヲ)○本居氏云思カケズニハカ
ナルヿニテシバシモ目ヲハナタスヿヲアカ

ラメモセズト云モ俄ニフトイサヽカ他ヘ目
ヲウツスヲアカラメストヽ云也アカラメサス
ト云モ為ト同シ目ヲサスハ物ヲ見ヤル事也
サレハ此言ハ物ヲ目ヲツケテマモリ居ル木
ト俄ニフト他ヘ目ヲウツス如クト云事ナリ
高明集
かくれき

あき 秋
拾玉四五十
秋のまま月風もそよぐ物ならば
○

あきぎり
清輔集
山里の庭のもみぢ葉うづめてせらのとぢ秋霧
山家集上十八
みそぎよりそめやそめけん秋の川
夫木十九 後治暦名所 晩風加秋 楠
ゆふけぶりたつのこずゑのうすきより秋霧ふかき風にほすらし
○

あくがる
後拾遺 源宗于
春霞たなびきぬとも思ふどち野辺のわかなを

順集 淺緋

○

保憲女集 冬 胴脇

○

続世 紫四 苞十四 色の色

○

足形

○

中務内侍日記 拾十三ノ四七 人長の拍子をあるなり

○

保憲女集 冬

新○愛惜紀

拾遺四

あちこち

中務日記 秋十三ノ 二十一

あづさ

続詞花戯咲

あつま 宿守也

源重風やとりし女の

いやあ〇

あつま

和泉式部集

源氏 三ノ

義本仲津白波

曾丹集

あつまぢ

あつまぢ

あつまぢ

あづまく 配々

源少女 三十五ノ

○源 [illegible] 受領 [illegible]

[illegible]

[illegible]
拾玉一九
[illegible]
大鏡序 扶七ノ十六 四ウ
[illegible]

[illegible]
万代迄ヲ 和泉式ノ
[illegible]
公任六丁
花のうちもふ[illegible]の[illegible]

○

[illegible]
野守鏡序 扶十二 七十六
[illegible]
[illegible]
なりなむといふ事

[illegible]
足荷ノ枝 アシナヒ
竹取抄 下三 ○詔詞解 一ノ四 十一丁 ○延喜式 木工
○吾本今昔廿三 廣澤寛朝僧 寺ノ壊タル 所々
正強力語

十四

修理シケルニ麻柱ヲ結テ畧麻柱共結タル中
ニ立週テ畧麻柱ノ上様ヲ見ル程ニ麻柱ノ中
ニ落迫マリテ畧麻柱ニツメラレニケル也畧
麻柱ニ跳フメラレテ○同廿五ニ麻柱ナトヲ
結テ下スヘキ方モナキ峯ナレハ○古本今昔
十国王造百大石卒此工ノ未タ卒堵婆ノ上ニ
堵婆擬殺工語
有ル時ニ不可下シテ麻柱ヲ一度ニハラ〳〵ト
令壊メツ○玉勝間

あまつや

あまつそ
あまつそ
あまつそ

和名亭アハテアハテヤ○宇治保一三十七才家のあるじ
杉流雑抄、好古
杉風いかがやあるじわれ
家集ニ句ゆきまよひて
渋乃いつきさ
堀川集七月朔日
夢ふきあまつ
源東屋たくい又かくあそ
同同
同ゆきおさえて○俳諧初硯

あまつそ　不遜　あまつそ

源ふるさとは　さとふるさとの　河考往云満而
不遜○ふるさと

なれり○万十九食國之四方之人乎毋安夫尼波
解十九下十五オ

十五

受愍賜者○溢（アフル）同語○又あふるゝ二同じ知らず可考○

あふはま
万八藤原朝臣八束歌一首　棹四香能茅二貫置有露之白珠相佐和仁誰人可毛手爾将巻知布
略解ニ云あふのふハ… 淡験アハサワ… 宣長云…

同上・

畧解八ウ　卅六

あへれん　あふぎあへんの給ふたまへしとのたまふ
業苑　しのぶのしるし　十六ウ　こやしきまへいまやのこし人はあまたとあれ
ぬへきれしあへいんとかへしきこえけれ
印本にあへんに化まへるへし今

八古本に之、
とそいり
○業苑　見えてぬ夢　三ウ　さきはいにへ　集業敵のさふらふ
しのふかまへとてもまいあへれんすといさしいきさい　○源
氏柏木まかけしかあふとはあへれん　河あへさん　あへれんと　○源ハの
けろふ　廿ウ　四十ウ　いれそこいあへはへぬ人はほしきにすむにもさき　遠
きこえものきこえるいとそそれてへあまたまへいるいあへ侍
著
あへん　とをしれんあり　花敵侍　○源氏末つむ　廿六ウ　平仲さかしはかりかきたまひし　○源氏　初子　十三ウ　心ひとつのかきなくてもかへりまちてあへしかみ
花鳥に敵しあまと
も堪の意なり

あまのつ
保憲女集　夏
あまのあまにつきまてわたるなみあまの川いくよの人のあまかへりなん

十六

○詞集序あり

○同雑上義人なし

続詞花戯咲 茂系往衡

小町集 延寿の法時日てうの一度いふもさき宮なりて

山家集下 五オ

金葉雑下 能因

新古神祇

あゆひ抄 泉卿

○江次第

あゆひ抄 素行

長明無名下 近体古体論

常花 万葉長哥 つゝ(つう)と

あやゝゝ 拾雑 哀
風をやさきの葛葉のうら返り
林葉五 夜のふるまゝにうそとこひくま
堀百 眼 恩
ふとゝもあれむとなみあやうてこ

あやむる 怪
千五三 ようへゝに
ぬえてゆゝあやさのゝゝ雲ゝやくもん
山家集上 四十六 あやうて〇隆信集三一あやもたゝりの〇

林葉五 あやむと云に同名恩 〇
〇人ナドキルヿヲアヤムルトヽ云ハ 山家集 代
ふまさのをさゝゝあやうてや 雲ゝもんのあにとゝき
此ヿ、ロヨリ轉ヒル也

あまもぐ 霰地
中務日記 あまもちのゝ居〇 続世継 ゝゝのあと
あまもぐなくもんのとん
久安百 安藝
雨もてさゝ後ゝあゝ

あつまれ〳〵あやそ〳〵やのうち
千載中 橘宗長
をやまとみつぐほそ〳〵やのあ

後撰 雜別

さしの國にまかりけるに人のおくりにあしがらまでまうできて
武紀(ミカドノフミ)傳忽(タチマチ)之間出(イツ)レ京(ミヤコ)不意(オモヒノホカ)○雄畧(ヲサメ)記(シルス)嗔猪(イカリヰ)從草中暴出(アバレイデ)○同取急歸(カヘラサマニ)レ家(イヘ)○同取假歸(カヘラサマニ)國○皇極紀(ミカドノフミ)急偷閑(カヘラサマニ)雲客(クモビト)注来○

あきのよや 秋宮ヨ秋の深き色をといひけん

尚歯會序 清慎公

まうして

万代(ヨロヅヨ)師時(モロトキ)

とのもりにみきのとくらんとのもりやおほきおほとの

あさくらや

保憲女集(ヤスノリノムスメシフ)春

うぐひすもなきもやまずおくやまのあさくらやまに

あはせ

拾玉四(シフギヨク)

あはせうた 胡姿

あさくらにたつ

万代(ヨロヅヨ)

新六(シンロク)

同 同 信実
秋くれば露の袖のあさくのみ
於玉四四十
あきてほどふる月の影かな
月詣

下四

千載 三 後頼
あさてのもちつきのやどもかりあへず
月詣 頭書

胡秋之
続詞雑下 橋敦隆
秋のあるとうりゆひしもそくよとうり
月詣

土上四十八
万葉 朝宿髪吾者不掻愛君之手枕觸義之鬼尾
手二集上六十七
もゝよゝ神まいらつくきくの私語きてゝものを

あさもよく アサモヨシヲ音便ニテ アサモヨイト轉訛セレナラシサ
テハイノ假字トスヘシ 但中世ノ説ニヨウハビノカナセ

袖中 を案あさりよいハ鮫ノ事ヤトカヤウニ
ほらかいくじを

○奥儀抄 あさよいい
きのこはゆもりしをいふ物の出きと成ぬれは
あさよりひとほどらくとめくれとうと云

あらう

酒奏 四十五オ 中將の君といふまほしくもとも
のゝゝゝゝ○菖蒲 九ウ 九ウ
うらせまほしくもとも

公事根源あらされ物とは

あづまこうや　○枕双子一巻三ノ十五日ハからあれせくもの

延喜式玉水式云　○江次第

○枕冊子

○長明四季物語

○公事根源上献御覧

あらきめ　味気無

新古雑上　和泉式ア

あらきみくさにおくつゆのまもなくきえかへりつゝ

あらきみくさとてしも味気無ふるくなりぬる

狭衣三　中卅六ウ　小袖をつゝなるもの

おもものくほろんとのものそ

あらそふもの　今倍こゝろあるをひとつあ

金葉連哥　和泉式部か

〜ゆくへもしらぬ袖をぬきてこそ小児の延年之

あらまし　松　二十九裏上　大弐をそうしてほくらこゝをゆ〜河間今

○同　三ノ裏下　三ノ裏上　いつきみそうなをうし

〜ふしとうらそもくほろ　ゆ仕

あ〜をとふ

宇治保　花間　あるきぬ
和泉式ア集　あつきものとい
ひくすりさゆるにあつき
夫木廿六
（山のとのとうとうとくの
ゆやとうりとよりあるき

あるきぬ　垂跡
隆信集下　神祇
（花　衣珠
あるきぬしるしもみえ
源氏明石巻　信吉の
（ことにはあらぬ

あなうらく
十六夜日記　扶十二ノ
あるこんろ　廿三
○

あゆうらく
和名抄　燈火部
（詞
山家集下　（飼書可考
（さく
（六波羅太政入道持経者ありけり夜ふ
ついてに万燈会ーくり夜ふ

あまびこ

○今物語　そもーそのつきのあ

源少女（ニウ）　ありそ海　○何尼類　○

あやめ草　危草即離根草

枕冊子　三（廿五ウ）　あやめ草　（拾翠園抄沢）

にぬきのあやめ（ぐさ）　○朗詠　観身岸額離根草

草○

あやみさき　荒神

あやめ草

源氏　総角（ハウ）　行くすゑいと世のくせいかならむ

きまうつも　孟能固ゑ枕ゑ人のまさくゆさあり　○狭衣

みさき又あくらけとふ岩神あり

一下廿三　物のさ法身のまもりあやみさだをいふこと

もあり　○平家物語

あやめもわかぬ

山家集下

あやめさす法にもゆるの風ふくいさるのちも我ふ

同

いかにさくまなくこと

詞雑下　増基　あやめ草

扶王（四五）　法師

金葉雑下　不軽品の心を　（元足雅法師）

あやめぐさ

竹取（拾上十二）　前あくいてそこうみけるまなけるに年月

夫木廿四　常不軽品時乃得聞是法華経

百代を夜のいそぢあまりとをみてさきける

あらき世免　歩行始

増鏡　老波　六ウ廿三ウ　八月ばかりの程にあらきをもとゝし万里小路殿

とぶらひきこえ給ふ○隆信集　中納言教長卿

あらき世免にこそ○拾遺愚草下　世おれ　中将雅経

のち我あらたまをふみてこゆるかなたのいそぢあまりたる年のほどみのこと○

あをそら　和訪也

於迷三ノ三　あき名のこ立ちの色はさくらにて

古今　ふかき山のもみぢはよるの錦にて

於迷雑ノ　みるからにあきはよるにて

同物名　あきをみまいまちたるかひもなく

金我引孫姫式　長月のまつらもあるをとふ人は一日もきみとうぬぬなし

○

あをそら

於四ノ三　とをそらの雲井鳥のあをそらに

於迷悪草上十七　雲ゐのかりのこゑのかすかなる

新六 光後

六言

○袋草紙 三十 二丁 可考

射恒集

小嶋口号 扶十四ノ上 考一ニ

猶大君采職

○

未定心

万十五 五オ 波呂波呂番於乞保由流可毛之可禮杼乞異情字安我乞

竹取 扶下廿三

万代 相摸
夫木廿六

○

あけぬるさ

狭衣一上 廿八

天皇御宇敬到六年初辰歳 駿河國宇戸濵に天人

豊原統秋體源朴 廿三 云丙辰記云人王廿八代安閑

あけぬるさ

浦の夕風

海士の苫屋の

周瑜が腹さもやう

浅於遠神祇 能因

袖中 廿三

新六　あきさ衣　信実
さ川の瀬にうちあつまあけの麻衣ふりまさ河いさてぞ寝なん

○

あとしかまり　謎

後撰雑四　あふことのかたきとりてかく扇をやりけるとて
けり○袖中抄八　さゝ浪のよし此条○宗河保　夜京のうへ志れ
ふとうてあふかまくしける○

あふきゆし

後撰恋五　男の心かはりたるをうらみ扇を送りける時

此男の心さまりける扇にかきたまてやりける　うみ人しらず
人をうらむとて扇はいふべし思ふ所とも思はん
袖中云　昔ハ扇を人のもとにやるとてもいゆゝしきことにいひ
しとしいふことあり

袖中引古今
名にしおへはいかでかの扇をおもふかくしてもえつけあはれ
於逸雑恋　女のもとに扇をつかはしけれはいひおこせたる
ゆゆしとていむとはいへどあしくもあらじ風のつてまでと

大和物語　三巻一ウ　上句 下句
ゆゝしとていむとはいへど　うちおとしけん　ハ三条右大臣

同三巻廿オ
ゆゝしくも契りけるかな人とまうでしかなけれ世をとてそなれ
ゆゝしとていみけるあふぎかへしといふあはいそふかつまほし

あふぎさりて

新勅撰 恵妄友則
いつをまつあきのさそ
六百番 六 俊恵
こゑふくあきのさそ
長秋詠草 止
いつまでかこのもとぢ
拾遠 忠草上 九十 二
おもはぬあきもなし

和訓禁 ○臆断 ○屋代イセ

万代恋 素宗
恋ふる思ひあるにこそとうらこひ

あるをそ

万代雑三 遍法大僧正
いつくのあのそらもこきみを
新六 あめ 之後
うきことをわるこころ

異本拾玉
○をつきのそ
山家集
○うくものそ

あるにつけ
後拾雑四 人
雑上 ○ 人
あるきそふ

散木 麦五月五日東宮
てあまのつゆにくせん ○清浦集 七 人のそ

七言

竹取 いにしへのしづのをだまきくりかへし
昔のもの語(かたり)をするよりん方(かた)にはあらず○大和(せオ)
只千足ノ向タラム人の為(ため)(ゑイ)につきなん○今音十九(五条)
同同土只向タラム方ニ行テ尋ントト思ヒテ○
足ノ向タル方ニ走ルホトニ○

おもひのこと 豆結組
源繪(おほり) うちいでつるものからおもひのことけふぞきかれぬる
(ほり)

あさましのひとこと

源東屋(おほり) あさましのひとことをいふなるへし
(ほり)
河空也上人
花紀僧正

あさましの事を
隆信集下 五十一 世の中あさましくてやみぬるを思ふ(ヘケ)○宇治拾遺(オ)三十八ホトトギス
かくしてやあさましくてやみぬるを○源繪(オ)いかに」のとみ
きのうのことをもおもひいでられいかにとふ(ヘケ)ことのあさましさ 榊(さかき)云今云一云(いふ)

あふさ枕 ○おほくは人のと
（まて四もほとゝきす）
讃岐日記 老
あるといふことをきゝあはせて ○今物語
さる方なき恵方とふ人 中略 方をとるとて
うらなひもとめしを ○濱松物語 三世上 ○戸口のほとりに
て方をとるとて ○源氏角 可七オ
總一枚の戸口にたてゝ ○源氏若紫屋 十五ウ
風のなをとをこゝろみる ○川
係樓上 下 三条北方方おはしますそ仲正

狹衣 一 下廿三

そのあとをとこにあまるまでつたへて今そこ
つくしのはてまでくだりて道も狹衣を
（つくしのはてまでくだりて）

八言

あいのくちをとる

土佐日記 たかおしの事のそらを
（百年二十ヲ元の条）

○保憲女集詞（七ヵ）

あまき風あらく
清慎公集
そらもとりてまきあげんやうにあてどころを
源 きりつぼ（桐壺）
十六ウ あらき風をきしりけのうへにうちふきたり

十二言

あやまち侍らん、うまつ
万代春下
こゝれ沈のあやまちはかきつ（歌）

○

十三言

あやめのまをそうさ侍にて
源氏須磨 あやめのうさ侍にて
（カ）
侍へうし侍あやめ（ひきかけ）
（ひきかけ）
ことにとゝもくのつゝしみやとゝもくのつゝしみや。

清水濱臣輯

いの部

二言

いこの 五十日

榮花月宴 九 ○拾遺雜賀 大弐国章
続詞花賀
いにしへことつてやちよのあそびをそ

紫日記 ○源相木清いかもちひのをさん

とし ○大鏡巻二 延喜条 村上天皇誕生五十日の

儲まうけて分ちし事ども ○同 春日詣 天のいかめしかりし ○同

栄宴下 今

○世にさうさうしきことにて

菅方
おぼえりとうこそ

大鏡緒取友鶴聞那國星狄碪見留秋之菊鉋

うつほ 蔵開
いつにもときゝつるわかれにかはりていくよとちきりておきぬらむ

宇津保 蔵開 いぬにもちらさは何日にかへらむ ○源
宿木 又のとし君のいつにあたりける日うちつゝきてこのくさらい ○増鏡
○いつきをくらしつる ○源
うちのむつましき 宗尊 清平日のけしき 中略 関白殿もまいり
たゝくちのみゝしつめのふ ○同 同 関 七月二日うちまいりて
院子のたる十日きこえたるに 中略 こえくるまて万つきたまふ

いつ 厳
宇津保 とゝのあるをいふにいつきこえ ○

いへ 家 ○即妻をいへり 後俗家内といふことし
宇津保 左大臣の家もとよりありしのかたに
人こ ○ 万葉

いろ 倚廬
顕輔集 いろにありしそのかみのいはひ 今はいとおほえ ○
続古哀傷 詞書 ○浜松物語 いろのほどはいはい ○同四
いろのほとは花やかにまめなることをいふ ○

いくき　齊垣○いみきの約
万葉上廿九
ちとやもち神のいきもこと一ちまの人のこちにけり
抒き並四人九とそを
ちゝ者のとり
六帖社

伊勢物語
ちとやもち神のいきもこと一ちまの人のこちにけり
続千載三　とそ千代
抒き雑秋　とそ念
ものやもち神のいきにたるふるあまのいきたれ同

いとき　蛛綱

さゝがのくものいきすぢもくるしきこゝろ
抒遺雑秋好忠　家
秋風いたみそやゆらぐ屋のあさぢがくせう妹のをきな
家集　八月終

○和泉式部集　そのいき　○実方集

いりけ　沃懸○射懸
夫木四　家集　仲正
ものもやれのこきゝにつゝまれ花のいりけち

○

いくせ　幾瀬○いくせのあらん
山家下
みきとるかくしこゝろ大あこにいくせ代をこのちもめる

○

いけ　生洲ノ義

袖中一　廿二　久冬ととりて池水中編竹籬養魚也どろし○和名抄

いさを

四季物語　三月　かぞふるのいさを一ときくまで○

いさき　旨ノ義味ノ今俗婦女ノ詞ニ美味ヲオイシイトイフコレナリ

いけ
いけ

永正五年正月二日狂哥合判詞花ちるものいけるの字訓保吹上中いきさりけるを

〳〵○神代紀　雉国(イクニ)雖(イミシト)○盛衰記十七歌ノ音ノヨサヨイシ〳〵ト嘆ラレタリ○同同イシクモウタヘル者カナ

いしみ

散木　夫木　仲実ら

夫木一同

袖中抄 十六

いしむ 竊

埃嚢六 八 不苦非竊○ ユカマス イレヽス

一の巣

狭衣一上十六 さうふつの人一のさえを一のあを一の法師一の長者

〜ぬる○源若菜上 世のつねならぬ名のとり

いこめるとぢめの法師にてん行 孟 天下才一 ○ 仁 名物 升

モチトイフ詞音也 ○ イチモチ 下文

一のに同也

○今昔古 世 寺殿我

ヨコカ国ノ一ノ法師ニ被用レ○盛衰記十

五若宮御出家ノ後ハ安院宮僧正トソ申ケル

東寺ノ一ノ長者也○源繪合 琴をのみとりて

一のさえふ〜次ないとこふえ○

いけも 何時ニテモ

中務内侍日記いつとなくいけもの

そのまゝにて

いなせ 屈請紀○ふいなセ 諾ハいとよりの事にてせ〜なの時

語ぜいなの約

万葉
ふもとを
後撰恋五　伊勢　おのまとりたるあをつゝみもせといひ
そめてと中ごろ　うるさゝもいひそめてまうきあゝ
みとそいふせ孫引
思ひ川ふ○

いなや　否　十八助辞
栄花月宴　五十六

いな舟　木石

文集
万四　家持
保憲女集
いとゝいとゝともうらいきれ
ひとと

遊仙

いそけ
栄花　かゝく着つゐうにいそ
紫　○同繪合　着にいそけうしまめ
らしゝて○同若菜上　さてあるれいをもてあそ
多そゆきにんいまてうけ　○空
徳お源　義岡　中　あらくしかくあらくしきのふ○

いそ松　柬ヲ言トイヒカケス不言ニイヒカク不言ハ少ク言ハサル
万代雑二　多しのまさて　小町
和名　○源朝臣いもきとう咲（おまま）
いぐき　呪鬼　経文　八〇今昔廿六四男寝引ノスル方ニ和ラ寄テ
○源角總いもをかくしもる○桃　冊子ふくきをのさる
たゝのいひそ　○讃岐日記
いひげ　飯器ゝ　常陸河内郡小野ノ辺ニテ飯櫃ノ口ヲイコト云ハコノ縛也
うつ保　春日詣　院のはいかけ
いはい　詞花雑下　花山院
かくしつゝそ恋ん世ゝ来ん後
○
いみれ

栄花 月宴 五十 ほいこれ法師ろときこゆ 誼之諱ふいあ〜
う奏ここにおほ〜 にまろの写誤
皆いこふしとそ
○同花山 廿

いもそ 江次第 以毛比○イミナノベテ イモヒトヲ之尊居ノ
美ニテ イモ井ト云ハ證 十二
源権本 いもの ほたいつなほかまる ろい
阿 神さまにそくまたくこと人のこころうたへぬる
隆信集 いもろさ〜にそ〜ほと
六帖 人のいもとうときこゆるものそ
万代秋教 天台大師忌日ヲ 益恵大僧正
続後撰 秋教 ものからのいもの名よあまりまろし 至の近しけふやさくん

大和物語 夫木 廿四 毎日一首中戒ヲ 為家
いまもろこそのまをこし
夫木 廿六 後成
さくらに雪 ろ市のそ

○

いろへ 彩○色ニヲ
竹取 ろ〜のうろまきろをろてはりー○源若
菜下 廿 ほのとたに先のこほいろふ ほいちつくこ ○縣居
云 三部抄 イロハ 色延の器之 交ヲほ〜ろ
言釈

マナカナ
カナマとり
草ノ手
草カチ
ヤマト文字

いろは

河海十二 梅枝 引江談抄 伊呂波ノ説クハシクアリ

高野日記 いろはの四十八字 これ猶可考

壬二下 あさか潟なにはに残る人のけしき波のいろはの行ゑたとり

源 梅枝 よろつの事もむかしにはおとりさまにあさくなりゆ
く世の末なれとかんなのみなむ今のよはいときはなくな
りたるふるきあとはさたまれるやうにはあれとひろき
心ゆたかならす一すちにかよひてなむありけるたえにを
かしきことはとよりてこそ書いつる人へもありけれ ○ 狭衣一
下廿四 いろはなと書きならへける ○ 今昔廿九 四 假名 本居説
交リニ此ク書タリ ○ 源 繪合 さしのてにかんなをあし
にて書きて○ 源 少女 おほとうはきみきみからにうち
ませたるそ○ 源 総角 あやしくなめらかなるもさ
まつれ○ 撰集抄九 廿九 漢字ホ所々に大和文字を
あそはしてまいらせ侍り○

かそへける

いろは 母

実方集 おやのせいしたる雨はいくたきてふりまさるとも

いろはまては

堀川百首 春雨

いろもなきおやのかふにも春雨のふるへきものといふはかりの

いろいろふ○亭とにこくあひ日をのはる
源松風帷光朝臣 まいの志れふるこちいふとれくいろ
えつくほつくんれえ○東鑑六可令停止地頂綺(絵)
○

いろめ 色目
続後拾亜四 近院右大臣
ふるのあやの名めも物
万代亜五 近衛左大臣

○大和物語 二句 あやをい 繪合 ほのとを○

いく一入
いく一村

いく七夕
夫木二 為家
あまのかはらふくかぜのこゑまちて

四言
いろ
筏士
金葉秋

志深集一
うつほ 祭使
あやにおもまけはて

新古雑中　西行

志賀浦をいくつもにごりすみわかぬ

いさなみ　万八　万十一　卒尓　是ハ誤也万七伊尓佐日尓とあるに同意之
卒尓をいくらと訓しは考會にいふにもやはり同挙○

.

いそもの　海藻についてもいふまじきにあまたあるにより必海藻之物と定めてかくはいふなり

十六夜日記　いそもの

いそにおもひをくやくしほの里の蜑人

いそもの　板垣

.

須磨生　いそもの

河そこいそもの事歟

.

いちもち　逸物○今俗いふ一物とかくしは誤也逸物ハいわしの上文ふたゝびあらハ一のことの詞則ちもち

守山集　春日詣　春八

もちもちそこのもとの事に答ふるにもちもちの物○同条使

物○同廿八七世衣」一物ヤ　並ニ馬ニ　○

.

いつそや

源氏総角
いりえや　ものさびしきに　ひとり

いてぎえ

源氏若菜下　俗の上　まめだちたるふみどころしもなつかしく
てきえいりて　源氏東屋　こてさえいりえのうらに

○

いりたち　発足

十六夜日記　いとど多ちとせのいりたち

いといけ　語未詳

竹取中納言　いくつもあるらんと（にせ
うそいとのいけまと後拾遺
うそいとのいけまと

いとまきせ
催馬樂譜
さ…
袖中十一　廿四丁
引　○

いおころし　鳥名を
小町集
秋の田のかりほき刀ろ

余枝抄四　[illegible]小町集の注は小町
[illegible]稲負鳥の一名かといふ

いとのこさ　稲莖
隆信集
[illegible]
散木

いとのき
堀百　蚊遣火　隆信
[illegible]

堀後百　根田　兼昌
[illegible]
林葉又　被厭下女恋
[illegible]
為忠朝臣家百首　為忠
[illegible]
現六　[illegible]　袖中五

喜撰式云若詠田舎取[illegible]

いとのけ　国鳴
字鏡
[illegible]
扨迚亜四
[illegible]

いそのかみ
深秘いそのかみ奉名
いそのかみの烟をまつにつけても
同ゆゆしくて
こものとぢてしらぬいまそかりける

イハカミ
石神
三代紀廿六云貞観十六年九月丙戌朔八日癸
巳石見国上言石神二自出雲来旻日授従五位
下
金業亜下寺石云といつることをふまへてよめるなるへし
弟弁院六条

待賢門院堀河集同
栄花根合
さきのはてもうつろひ
つゝさきのかうのしたる夏ころほひ
けとこゝろほそのけ河にたゝよふ
ゆくさきもしらぬ
久安百首公能
石神のとゝとゝんさめ
コレハ別物カ

いそんや況
伊勢物語
やそしまの人の国王と妙心寺
そんやそのうしの王いそんやそのうしの王いそんとはしめて
○宇治保 菱東男いそん

十四

所謂

東鑑 世二 二 不可有御延引之旨仰切訖○

城等豈ニ○

大中臣ら〻ふ清原之輔源次紀昭文坂上望

後拾遺序九阪い

五十日 ○つきのとし○又のとし○正又四九日 ○あ〻もろひて ○四十九日 ○つゐもつきぬ ○一月のふ〻 ○忌月祥月ノ ○五七日 ○七日七日のこと ○ふうそく ○ふうやつき ○軽服 ○三十五日 ○十三年

隆信集衣傷 倭正範云のそうそう又十日をきて ○同
五十日うちとおりて ○同つきのとし ○ことに休事せ
ことに定れるのそんのことをそうそうさてもあくまでふ法てを
名ゆふくるのゆとうんへきやそあ 迎しなまし 衣と
思ふつのゆとにて ○源氏葵 正日ふく
いおほりて 河正日忌四 ○ 正忌日ニテ今イフタチ
日ナモ 十九日ニ ヒナルヘレ 又一周忌ノ忌
イヘリ ○隆信集衣傷つきのとしおそにとこあり次
に正日小葵へ参てゆをそくれなるみつ吉事おそ
きとも今のう旅ふとゝふ心れ法とゝふのまゝ

山家集下 八オ 又の〻ち…代にて○同下 十 ス十日のことに
いでくる○同下十三 ふかくの里さそひてあるのみにふる雪
言葉へ(ゆきて 秋風)○四十九日 於遠物名 ○源氏榊 十五
古今六帖九日まくい ○栄花 月宴 十七 又のついでもつまおそ
しまそ 後拾遺 千歳円融 六年 栄花 月宴 四十九 九日
ととぶまい一月のあ〻そあ〻る○万代雑四 人の
なやのふくぬまをたのゆふかぜ
うら衣めくまに神のゆるしそ
後撰雑二いとゆふくあるふるさと ○源女女
やまいの故実 古今六帖 ○小馬命婦集堀川

の后うせ給へ…五七日七月七日にわうう…
○狭衣二 七日くのことをはらもまにもやうにて
狭衣四十七 ありきまうきうの
業苑 月 うらしのたくもやうにぬ
二日い十三日うてうの ○同衣珠 ○新古衣 定快法親王 かくま
ま 周忌のうらに ○千載衣傷月忌の日このう 所
にてうたふ○新勅雑三 八条院かくまにあうたにて 伝実朝
二日い月十支にあうたにて
やうにふるの元には秋のあはうきくもの
源仁業賀 ふくをこうい三月あうて 河物忌今日祖父祖母父方い 十六

暇廿日服五月毋方ハ○源 幻 法云ふいかもものくる
暇廿九日服三月 いやもり〳〵 添細流云云日いをく字音 ○増鏡 浦千鳥 後深 法門
こもい月忌をふ
ハ淳輕服の儀をもちゐる 伏見院 崩御 ○東鑑
十二 六 法皇三十五日御佛事也○玉葉 秋 後成々
十三年佛事に ○東穂録云漢明帝營壽陵之詔
過百日惟四取設奠北斗書炅暉傳云每七日及
百日終炅暉恒為線請僧設斎北史魏胡太后父
国珍卒詔自始薨至七七皆為設千僧斎令七人
出家百日設万人斎二七人出家○

いやもり〳〵

いや〳〵 否

落くぼに 北のくいやなくなくなくなゆめ〳〵 唐物語 呂后いや
ゆめ〳〵くるき事をもたくる○添ふいや免の
なくとてくるほどもりくれと○栄
花 そのこりく おくよの事いやまし 源氏ヤマノ
ヌワキヌ コヒヒキヌカナシミテ イマノハイマフトイフ心ナリ ○源 早蕨 つまをた

いやおひ　添生
尚歯會序　野一のまいやおひの月
新六　やよい

いよたつ
字鏡

○枕冊子

くけき
かそそうつ

堀後百
山家集上
同下　六十八

○

いらくさ
長明無名抄上

○源橋姫（湖世方）

（玉）河さむき（朋）

待に勢皮と
三是ン

○落

十八

いつとなく

延喜式

みの同 [illegible]

○枕草子 名おそろしきもの [illegible]

いろえ 気色めくこと

隆信集 水辺菱草 [illegible]

皇葉秋 顕輔 [illegible]

保憲女集 [illegible]

○

五言

いきすだま

和名

○遊仙窟

いきのした 息下

隆信集恋四 [illegible]

いいつもみ 甕

○枕草子 名おそろしきもの いきすだま

○源氏

いきのした

○竹取物語

○添幕木

やと女のもとへつかはしたりけるを
皇后宮大武

こゝろみむとてあやめをまみよ文をつゝみてやりけれ
散木雑　ゝ　俊頼
ながらへてかゝるためしをみるにこそ神もあやめのねにはかくるれ

保憲女集　ふぢをゆきさしてのぞきたるに
ふぢの花をけさこそ二条大武集に續答ともに入

○夫木　世二　同
続古神祇　入道前太政大臣　覚轉　無上法轉　西行
三笠山神の社のそこ心のたのもしきかな
夫木世四　湧出岳得成寂正
春心のまゝにこそ浪もたゝめ

いくそぢ

空穂祭使　男女ともにわかてそでぞきりける　淳和
○和名抄　彈碁今一名指石　始自魏宮文帝於此投且好矣　○酒頭广名　万水云今の世にこ　○散木いくそぢの石合○金葉哭　○一条大納言家哥合　石名
取木これいくそぢの
番
赤染集

○栄花

新六

山家集

○和訓栞委注○

いそうらし
海人宇告良
あせもにたみもこるもし
同
うらとゆるふねのなをたえしてきく
頼集
さみだれはまこもいさをあやめかな

いそひめ

あふといふことをいそのかみふるとも

いそうらし
宇
訛

いちしやさ

大和物語首書可考○大和物語いちしやくいけ
まもちくたなうての○源氏須ヲいちしやきらのい
とおふ〳〵待ま〵○同いちしやきをも思ひかりて
○源氏榊后のきいちしやくいちしやきこやいとも
○伊勢物語人いかくいちしやきこやいとも
○盛衰記十五世ヲトル人ノ子トヽ云ヲカラ一
ハヤクソ覚エシ○祝詞式　○遊仙窟頭書

いつそとい
万十一
古今秋上
大和物語

神武紀
万代笑

類句伊部

後於雑云

詞花

続於

同

山家下

千二上

於玉一

栄花

○字部保 何事とい

○枕冊子 十四段 コレハ誤ニ

○嘱 コレハ○万代神祇 鳥羽院御時 ゆき事そ

○隆信集下 六十八 仁後法師

嘱ノ方ニ○イヘリ

いふかひなう　云延

隆信集　恋五　女のもとへ

○

いへの風　家風

拾遺雑　春日野のたにかげしげみおそのとやどる
後拾雑四　後二条院越前
いへのかぜ　いへのかぜ

○山家下　廿三　○讃岐集　二首

いへそえに

六帖　うみ
いつそたにくさもおひぬ
伊勢物語
いつそたにくさもおひぬ
新勅恋一　業平朝臣
いつそたにくさもおひぬ

六帖　呉平
いつそたにみかくさまきの
新勅恋五　
いつそたにうるしく思つ

万代云四　定家
於遠愚草中

○

（イタリ）今内裏（スヘテ臨時ニ天子ノオハシマス所ヲ云）

栄花（花山）（ヒカリ）

（レマスホトヨイフ）○枕冊子（十七段）小一条院（ノ事）

（イタ）

六言

いくへの（五十串の垂）

隆信集

○

（イタキニテ）

六帖 枕

（イソ〳〵キ）

戴餅

吉事談 六安藝守基明嬰子之時 正月一一之間

卅納言入道祝言戈学者祖父文章者如父云云

○栄花後悔大将（中畧）

（同）○同

紫日記下（廿六丁）○栄花（同巻十七丁）○浜松（巻十一丁）○同

同

小嶋廿号南堂

遺愚草員外

拾遺恋二

後撰恋四　菅原成国

伊勢集

無用者　何ノヤクニモタヽヌモノニ

栄花　月宴　五十六

いつのとを

いつのもの

古今長哥 忠峯 つゝ
そゝ〇千長哥 俊頼 つゝ
いつのとをにうつりゆく

いつのもの

後拾遺序

いつの人五人

拾玉四 四十九 法花合別功徳品

いつのまに

一のところ

栄花 松山 関白 十二
つゝ世の一の雫にやそ〇

一味(イチミ)の
後拾遺 釈教
つゝまに

いつもの人
子二集下
おさふ

いとれなまて　軽少そうと云ニ

うりは　終使　さておきまにいぬもかつ(くさ)

らもくさとてほん○

いとゆのい万

▾雷井集序いとゆのひともおもてに○

いぬゝときてま詳

狭衣下下三　いぬゝときまてとやうにふことあやま

ゆとひと　犬モ時来テノ○

アヤマリカ

いぼゞまゆい

新猿楽記　云蟷螂(イボヂリ)舞之頂筋○

今様色(イマヤウイロ)

源末摘(ウツムハナ)　ほや〳〵名のみ

なりのゝ　花多紅梅のこきをいふ　かち(いろ)ともいふ又白梅もあり

ほや〳〵と羽しほれたるさまをいふ　○源(ウツムハナ)　四ノ巻

とくまてとゝ　○同　柏木十九オ

いぬゝいろなきぬ　河今掬色紅之　聴色也　今掬色是名黒色紅にうすくいれたる聴色

とあるに疑はしく時は今摘色とある之 水原抄 手上にあり 紅梅なりといふ
く又源氏にもいふらし それとおなしわろきなり

○源 東屋 今摘いろのうちも

卯月のいみ
日月
九月十月

いむ月

壬士集下 不逢恋
いかにせむ忌月とあらはあふまいかなる宿にやすらはん
山家集上 不尋聞秋 忌月といふことをおもふ歳神まして人とはぬなり
郎女卯月の忌みおもはるゝをおもひすてゝしきなる事なり
同上 九月ありあけなり年閏月にていむ忌といふことを人とよみける
長月のあまりにおきたるていむ人のいふやあらん
同上 清あれの比に歳といひたるにかなふ忌といふなりとよみける
おもふにはいまぬをもたせや卯月のけいふなるべき
万秋亜二 さ月の比いかなる事に此月をいてかひなしとて 檜垣嫗
人のいむ此月をはかりてはわすれすな後はうちみぬ

○ら川原 若菜上 人のいむなる月きは ○源 若菜 月きは
いむ月はなりぬるなんとのみ思し ○月まては九月なれは入内之
うつほ吹上下 内かへ王へき
春の月はいむ月にて此あきなつ秋まつ夢にいなり
○源 東屋 九十月はいかにてらすとて 若九月はいむ之十月は
かつ月にてみなもうたこそかき
月まう ○同 同 九月にもありぬる残れるのたそや○

いつもそみける

源 明石 日頃をほかりそみける風のけはいに○同 野分 之
六 六
ちはしいりなむる風なれと○栄花 つぼみの手 人も
まさぬあきつき佛をいかりとみかくても

いろにおもて　色好におもて（こほ）○色十キ八無惜也

栄花　花山　廿八　○栄花　月宴　十七
新古雑上　秀能
あかつきの神をいろ〳〵月やそら

七言

辻大路ノ説ノ部

いろ〳〵のつち
いろのみにう〳〵

いろ〳〵のはな

法華経云一者不得作梵天二者帝釋三者魔王

いろ〳〵のつち

落書露顕序　いち所ちの説のごとくに○

四者轉輪聖王五者佛身

新勅釈　尼の我うけ給りて　大僧正親修
続古釈教　栄師如来を　知家
林葉三　折草花供佛
いろ〳〵ありてあらたまる

源白　いろ〳〵のゆめ

いとゞのそら　葬礼に死人をのほらしまいらせ

栄花　月宴　廿六　いとゞの煙をそへて

いとゞよそゆ

後撰恋二

○拾遺恋ヌ

○源 常麦 廿五

河

○

○源 早蕨

○玉小櫛可尋 ○宣長云

古今秋上

○

同秋下

○和名抄

○菅万 淑

大和物語

堀百 田家 仲実

同 公実

○

円

○

円

○

万代雑二　源順

里とほみ
林葉三
夕されいその山風
万代秋下

○秩衣いその風

○

順集　九月小さかりの

○玉

○余材四

○僻案抄

いつ

源横笛

○

遊糸日記

○

イマヤウ
今様
長明無名抄下

八言

いそのかみ ふる

中務日記大嘗會の
ろくのもの〳〵 ○同 同上 ○同 これのこと
れとてあるべきを
もてやとこゝも
いそのかみ ふる
貞觀儀式大嘗會条可考悠紀方ヲハ稲實ト部ト
云ヒ主基方ヲハ祢宜ト部トニフ○

十言

一天下（イツテンカ）のとこ〳〵
栄苑 かく〳〵

十一言

いとゆふの神木（オホンキテウ）帳
守り保 祭使 かくて
のこき〳〵てとゝろえて夕ゝれはまんくらゝゝとあけくらゆふ

十一言

十言